
ボストンバッグは空っぽだ

山田スウェル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボストンバッグは空っぽだ

【Nコード】

N4456Y

【作者名】

山田スウェル

【あらすじ】

タンナーはカワに気持ちを染み込ませる事にした。

『クローム』と呼ばれる、生まれた時から殺意が染み着いている僕と『タンニン』と呼ばれ、善意しか知らないヒロインとのストーリー。

これは鞆に詰め込んだ世界の話。ハンドルを握れば、ぎゅ、何かを潰す音がする。手の中を確認出来ない弱虫達へ『サワガニピース』をしよう。

定員オーバーのバスは世界がいかにも退屈しているかを表していた。ついに、このままだと発車が出来ないとアナウンスが流れ、車内で唯一着席を許されたタンナーが僕らのチェックを始める。さっそく一人を摘み、運転手にドアを開けるよう手を上げた。その間、僕は沈黙を守った。文字通り、摘み出された彼も無言だった。そしてバスはまた走り出す。置き去りにされた彼は砂煙にまみれ、もう見えない。

「さよなら、兄弟」

誰かが言う。

「喋るな、酸素が薄くなる」

誰かが怒った。

密着度が高い為、それぞれの息遣いも伝わってくる。みんな緊張を隠せない。当然だ。

僕は小柄という理由でステップ付近に立たされている。たぶん、次の駅で降ろされるだろう。サンカクと呼ばれる街は僕みたいなクロームが活動しやすいそうだ。

指紋だらけのガラスに映る僕は、人間における15、6歳の少年。こんな華奢な体が役立つとは思えない。幾ら数を出荷しなければならぬと言っても、僕は早すぎる。

先ほど降ろされた彼みたいに有害物質が付着したままではないが、

腕、特に右腕に足らなさを感じる。こんな違和感があるまま、引き金を引けるのだろうか。

「よお、坊主。どうした？　びびってんのか？」

彼が僕を観察していたのは知っている。中央に立っていたのにわざわざ近くへやって来て、見下ろしてきたのだ。

「どうした？　声も出ない位にびびってるのか？」

染めムラがひとつもない正しい体を見せつけられる。静かにその時が来るのを待つ周囲は彼に苛立つも、言葉にはしない。タンナーだって目を瞑るくらいだ。

「まあ、リラックスする事だ。そんな顔をしてちゃ、上手く行く事もいなくなるぞ！」

「僕は笑えないんです。顔の筋肉までオイルが入らなかったんで」

彼を見上げて答える。

「あなたの様に充分なめされたら違ってたんでしょうけど」

すると男は髪を掻きながら、困った表情を浮かべた。そうして感情を表現出来る事が嫉妬対象なのに。そして何より気付かない鈍感さが人間っぽい。

人間に似た、クロームの成功品には特別な任務が与えられると聞く。彼が紙面を賑わすのもそう遠くないと思う。

「降りろ」

気付くとタンナーが僕を指している。動くのも面倒らしく、クローム等が身を擦って指先が通れるようにした。

「待てよ、俺も一緒に行く！」
「は？」

ドアが開くと先に降りて行った。彼の下車に焦ったタンナーは側のクロームへ追うよう指示する。

「ほらよ、荷物」

足でドアを閉め、ボストンバッグを投げる。少し車内に振り返って、肩を竦めた。

「あーやだやだ、スティックサイダーは」
「あなただって、そうじゃないですか？」

思わず力が入り、合皮が軋む。バッグに詰め込んだのは二日分の着替えだけだ。文庫本を持ち出す事は許されなかった。

「いや、俺は違うよ。お前等みたいに突っ立ったまま泡になるなんてゴメンだ」

彼の背後を叩く兄弟達。見れば長い足でドアを開かせないよう押さえてある。

「もう一度、僕らをスティックサイダーって呼んだら怒りますから」
「はー、やるってか？」

首を横に振る。

「あなたに力で適うなんて思ってません」

「だよなあー」

「でも」

僕はポケットから潰れそうなペットボトルを出す。と、男の顔はみるみると引き締まり、降参だつて手を上げた。けれどその指先は一方で太陽を引っかこうとしている。

「あなたがクロームである限り、これが苦手なのは同じです」

「はいはい、分かったよ分かりましたとも。バスに帰りますつてば」

自由な左足で蹴つて、背中を向けられると、ジーンズに文庫本が差し込んであつた。

「ん？」

視線に気付く男。

「お前も好きか？」

素直に頷く僕。

「そっか、あの施設で娯楽つて言えばこれくらいしか無いもんな」

文庫本を抜き、ぱんぱんと表紙を叩く。かなり読み込まれたものでページは波打っている。

「ほれ、やるよ」

「え？」

「どうせ返して貰えないんだからさ」

つい受け取ってしまい、言葉に詰まる。男は構わずバスへ乗り込んでしまう。

「あ、あの！」

「ん？」

「あ、ありがとう」

感謝は伝わったか曖昧だ。乗車するなり彼はタンナーの元に連れて行かれ、そのうちバスが動き出す。僕は今日からこの街で死ぬまで生きていくんだ。ボストンバッグと文庫本が決意に軋む。

砂埃が引いた先に広がる市街はそれなりの賑わいがあり、鐘の音が響き渡る。食料を抱えた女性等が行き交う道は昼食の香りが漂い、やたらパン屋の看板が目につく。

資料によるとサンカクではサンドイッチが主食で、トマトやレタスなどの野菜を栽培する家庭も多いらしい。

行列が出来る店の前を通り掛かった時だった。何か懐かしい気持ちになり足を止める。少女は店先でみずみずしい野菜を挟んだサンドイッチを頬張って、そんな僕を爪先から見上げた。

「あなた、クローム？」

「ごつくん、音をさせて飲み込む少女。壁へ寄りかかったスカートに汚れが無いか確認しつつ、こちらへ近付いてくる。そして列に並ぶ人達は少女を目で追った。

「あなたは？」

「わたしはトウミ。一応、君の先輩になるのかなー」

言って、トウミと名乗った少女はピースをする。

「あれ、知らないの？ これ。サワガニピースだよ、サワガニピース。チヨキチヨキってさ！」

ハサミの仕草をしても僕の沈黙を切れないと分かると、トウミはサンドイッチをかじった。

「君って、つまんないや！」

強く噛んだ拍子にトマトの汁が飛び出す。

「あーあ、またやっちゃった」

胸元を摘んで、染みを嘆くトウミ。

「吉田君って、うるさいんだよねー」

ちゅうちゅう、音を立ててブラウスに吸い付き始める。しかし染みは薄くなる所か、口に残っているソースによって大きくなってしまふ。拳げ句、中途半端にかじったサンドイッチがバランスを崩し、中身だけ滑り落ちていった。

「あ……」

トウミは僕とサンドイツチを交互に見る。

「落ちましたね」

「うん」

「勿体ない、ですね」

「うん」

サンドイツチを拾うでもなく、僕等は向き合ったまま。

「同じクロームなのに、ちっとも似てないのねー」

「それはあなたが成功品で、僕が粗悪品だからです」

トウミが大袈裟に肩を落とすと、髪と肩の隙間から男性が走ってくるのが見えた。男性はトウミをお嬢様と呼ぶ。

「あら、吉田君」

何度目かにやっと返事をするトウミ。

「あら、じゃないですよ！ 一体何処に行ってらしたんですか？」

「んー、サンドイツチ屋？」

僕に訊ねてくる。

「そちらは？」

白い手袋が僕を差す。

「お嬢様、仕事を増やす真似はなさらないで下さいと何度申し上げたら……」

その白い手袋を覆う小麦色したトウミの指。

「はい、はい。何度も伺いましたって。じゃあ、帰りましょー」

不満を口にしながらも踵を返す、までは良かった。トウミのもう片方がいつの間にか僕を掴んでいた。

この頃の僕には想像出来なかったんだ。トウミに捕まれたのが腕だけじゃないって。

僕等に乗せた馬車は郊外へ向かう。手綱を握る吉田はあれつきり黙ったままで、トウミも流れる景色を眺めている。

日除けがあるだけの簡素な馬車はよく揺れた。振動は空腹を刺激し、何処までも続きそうな沈黙がポストンバツグを抱えさせる。腹が鳴っても感付かれないように。

街に着くなりクロームと出会え、行動を共に出来るのは幸運と言える。それもトウミはフルクロームだ。フルクロームは兄弟の中でも別格で、こうした生活を許される。吉田のような世話役を与えられたり、人と積極的な接触が持てるのだ。

先程からこちらに向かって手を振る人が居る。また馬車が停まった際にトウミはサインを求められもした。

幾ら人と似通っていようが所詮僕等は偽物。タンナーによって人の要素を染み込まされただけなのに。トウミを美しいなどと騒ぐ人等が馬鹿らしい。もし顔の神経が生きていれば、僕は笑ったのだろうか。

いや違う。トウミは黙っていても、それが表情なんだ。

「君、何考えてるの？」

ふいと口を開くトウミ。目が合って付け加えられた。

「何考えてるの？ それとも何も考えてないの？」

その答えはどちらも、だ。考えなきや空腹を紛らわせられないし、考えなくともやらなきやいけない事など染み着いている。

「さっぱり分からない、君の感情が。ねえ、吉田君」

すると吉田は振り返らず頷いた。馬を操る背中が歪みなく伸ばされ、そこに実直な性格が表れている。

彼もクロームか確かめたくて乗り出したが察知され、睨まれてしまう。吉田の肌は喜怒哀楽を乗せる必要がないのか、まるで全ての感情を流せる様に滑らかだ。

「とにかく部屋に着いたら、君に名前を付けてあげる」

「名前？」

「そう、新しい名前よ！」

そう張り切る側に高い建物が見えてきた。馬車は入り口を目指す。と加速し、足場が土から舗装されたものへ代わる。

「ここがトウミの部屋？」

「うーん、そんな所かな？ 一応は事務所なんだけど」

「事務所？」

急に馬車が停まる。

「説明は後からするね、とりあえず降りて」

備え付けてある踏み台を使わずトウミは飛び降りた。で、僕に手を差し伸べる。

「一人で降りられる」

「そう？ ならいいけど」

微笑むトウミ。本当は手を握るのが怖かったただけだ。吉田が隣にやって来て、馬車を預けてくる旨を伝えた。僕を一瞬だけ呆れた顔で見た、気がする。

「バッグを」

「え？」

「お預かりします」

有無を言わず荷物を取り上げた時には、ポーカーフェイスに戻っていた。

「じゃ、行きましょ」

トウミはノブを回す。

「ねえ、入るの？ 入らないの？」

僕は周囲を一周見回し、一步を踏み出した。辺りに人気は無い。事務所と呼ばれる建物は静けさと畑に囲まれ、ドアの向こうの賑やかさが疑えてしまう。

「大丈夫よ、取って食べやしないから」

痺れを切らして入室するトウミ。数秒後には彼女を歓迎する声が上がった。

トウミを通したドアがゆっくり閉まっていく。隙間から漏れている明かりや声が細くなって、僕はやっとドアへ手を掛けた。

声のポリウムからしたら、室内に居る数は少ない。トウミと男女ひとりずつが腰掛け、くつろいでいる。

「おお、お前が新入りか！」

大声を浴びせられた僕はドアに埋もれてしまいそう。そして後退りも適わない姿を女性に笑われる。

「大丈夫よ、取って食べやしないから」

「それ、わたしも言ったし。それよりさ！ わたし言ったよね？物を食べる仕事は嫌だった」

テーブルを叩き、弾み付けて立ち上がったトウミ。と、すかさず男性がカップを寄せる。室内は椅子が四脚とテーブル、あと『925』と書かれた銀の表札が落ちているだけ。シンプルと言うよりは殺風景だ。

「まあまあ、そんな事言わないで？ あなたからも言ってくれないかな？」

急に女性が話を振ってくる。

「ほら、うちの事務所ってこんな有様じゃない？ 仕事を選んでる場合じゃないのよ」

「そうそう、借金のかたにアンコちゃんだって持っていかれたんだ

からよ」

男性の口添えにトウミの表情が強張った。

「え、嘘？ アンコを渡したの？」

「だって他に金目の物なんか無えだろ？」

開き直って両手を上げる男性。一方、女性は僕に近付いて来た。

「あなた名前は？」

「え？」

「だから名前よ……って、トウミったらこんな粗悪品を拾ってきたの？」

くん、鼻を鳴らすなり、切れ長の瞳がより尖る。トウミへ振り向く際、長い髪が僕の頬を打ち、髪から仄かにオイルの香りがした。この女性、クロームだ。

それに男性も。彼には僕と同じトラが見受けられる。通常ならトラや血管などの皺は加工で目立たないよう処理されるはず。それを怠っているクロームの程度は決して高いものじゃない。視線に気付いた男性はそれでも顔を歪められるらしい。

「この傷か？」

僕は俯いた。

「お前にもあるんだな、トラ」

頷く。僕には項から背中に向け、一直線の傷が走っている。男性の視線がそれを辿り、床に刺さったのが分かった。磨かれた床の中

で目が合ったから。

「ちょっと！ 男共！ そんな傷の舐め合いなんてどうでもいいのよ！」

トウミが間へ割って入ってくる。

「一体、アンコをどうしてくれるのよ！」

「あなたこそ、こんな粗悪品を拾ってどうしてくれるの！」

すると女性も負けずに食い下がる。

「あのね、いい？ ちはね、アンコー匹だって養える状況に無いのよ！」

言いながらトウミの正面へ立ち、手を腰に当てた。そうして向き合つと二人の背格好が似か寄っているのが分かる。これもクロームの特徴のひとつだ。彼女達は同じ工房でなめされたんだろう。

「お嬢様方、お止め下さい」

背後が開いた。

「外まで声が漏れていましたよ」

不思議な生物を抱いた吉田は光景に溜息を付く。

「アンコ！」

「外をうろついておりました。この街だと猫は珍しい生き物ですから、警戒されて拾われなかったんでしょう」

「失礼ね！ アンコは病気なんて持っていないんだから！」

白い塊を奪い、抱き締めたトウミ。にゃーお、苦し気な鳴き声に女性が舌打ちした。

「吉田君、せっかく捨てたのに拾って来ないですよ」

「あ！ やっぱり捨てたんじゃない！ 借金のかたとか言ってたくせに！」

「いや、確かにくれてやったんだって。そいつが捨てたんだろ？」

トウミの頭を撫で、男性は席へ戻った。

「知ってるだろ？ ここん所、体に爪痕を残した死体がごろごろ見つかるって話」

トウミは反応を示さない。

「何よ、その人事みたいな態度！」

「は？ だって人事じゃん。どうせ、タンナーの差し金じゃないの？ ねー？ アンコ」

僕は誰の言葉に付いて行っていいか迷い、最後は天井を仰ぐ。裸の蛍光灯が二本あり、ひとつは今にも消えそう。ちかちか点滅している。

「あちゃー、おい林五！」

「言っとくけど、買えないからね」

「あーやだやだ、貧乏って心まで荒ませるのよ、ねー？ アンコ」

林五と書いてリングと読むらしい。クリーム色を汚す悪口はトウミが書いたのだと容易に判明出来た。けれど、この高さをどうクリアしたのだろう。

「もしかして、君は飛べないの？」

天井から四人の瞳が一斉に落ちてくる。視線は僕を前後左右から刺し、ゆっくり抜かれた。

「にゃーお」

こんな僕を救おうとアンコは爪を立ててくれ、まず吉田の沈黙を破った。

「とにかく話をしましょう、みなさん」

白い手袋が二回、ぱんぱんと響くと、それぞれの目元から力が抜けていく。

クロームには協調性は染み込まされていない。むしろ、出来るだけ本能に忠実であるよう仕上げられている。一考に纏まる気配を見せないテーブルを遠くから眺め、ふとそんな事を思い出していた。

話を聞いていて分かった事が二つ程ある。トウミと林五はモデルをしており、吉田や男性はフルクロームである彼女等に振り回されている事だ。会話の最中に何度もサンドイッチを買いに行けと指示され、吉田が肩を竦める。

「お嬢様、サンドイッチを買うお金がございません」

優雅に映る四人だが、現実は厳しいらしい。トウミや林五の容姿が華やかで、ある程度の空白は紛れるものの、人数分揃わない椅子やカーテンのない窓。何より鳴らない電話が物語る。

「だから取材を受けなさいよ！」

「嫌、物を食べる所なんて映されたくない！ てか、林五が受けたらいいじゃない」

会話は繰り返される。僕も流石に聞き飽きてしまい、足元で丸くなったアンコを抱き上げた。

猫は工房でも飼われていた。決まった名は無く、みんなそれぞれ思うように呼び「ダレス」と呼んだのは僕。ダレスは小説の主人公で、とても勇気のある青年だ。

アンコは特に抵抗せず、僕の胸の中で穏やかな呼吸をしている。

「じゃあ、こうしないか？」

口論の隙間を縫い、男性が立ち上がった。

「何か良い案でも？」

「まあな」

お世辞にも滑らかと言えないウィンクをすると、ポケットから紙を取り出す。

「何、それ？」

「まあまあ、見てみるって」

皺を伸ばしながらテーブルに置いた。すかさずトウミが乗り出し、逆に林五は深く腰掛けた。

「世間を賑わす切り裂き魔に賞金が賭けられたんだ」

「賞金？」

「バカにするなよ？ この額あれば一ヶ月は暮らせる」

退屈気に足を組み替える林五に、男性は力強い笑みを向けた。

「とは言え、五人分の生活費となると足りないかと」

「五人？」

思い出した、トウミがこちらを指さす。

「そっか！ 君も居たんだよね？ そんな隅っこに居ないで、こっ

ちにおいでよ！
「トウミ！」

と、トウミの手招きを潰す林五。

「痛ったいわね！ 何すんのよ！」
「あんな粗悪品に構ってる余裕無いのよ！ 大体、粗悪品なら事足りてるじゃない！」

二人の無言が男性に向けられた。男性は紙から視線を上げかけたが、雰囲気を感じて文章を読み上げる。

「切り裂き魔を掴まえる！ 掴まえた勇者には地位と名誉が与えられる」

「……古くさい煽り文句ですね」

「言うなって、吉田」

「しかし、報奨金も魅力ですが、犯人を掴まえたら注目を浴びる事が出来ますよね」

「そうだろ？ 一石二鳥じゃないか！」

豪快な笑いが林五を我に返らせる。

「そ、そうね！ それもいいかも」

冷めた紅茶で湿らしながら言う。

「では早速、準備を致しましょう」

「でもさ」

吉田を制止したのはトウミ。

「これってお仲間の仕業じゃないの？ いいの？ 兄弟を売っちゃって」

「背に腹は変えられないだろ」

即答の男性。それに続ける林五。

「アンコやそこに居る少年を飼いたければ、納得なさいよ」
「では、さっそく」

吉田に合図する林五。トウミに止める間を与えないスピードで紙を取り取り、僕を通り過ぎた。

ドアが閉まる。トウミと目が合う。

「アンコ、君にはすぐに懐いちゃったね。林五には未だ懐いてないんだよ？」

「は、そんな獣に懐かれなくたって構わないわ」

ティーポットを男性に押し付けながら、林五もこちらを見る。

「一応、確認するけど、あなたにも名前はないのよね？」

僕は頷く。

「そう、ならいいの」

満足したのか、林五は言うとお奥へ入っていく男性を追う。そう言えば彼も名を呼ばれていない。

「気にしないで、林五はいつも上から目線だから。また機会があれば、君にも名前をつけてあげるね」

トウミが両手を広げたので、アンコを返す。アンコの息苦しさ」と抱き締めるトウミは無意識なんだろう。

この無意識こそが世界を殺す引き金。引き金を引いた時、どんな弾けた音がするのか想像してみる。工房と違って意識すれば様々な音が拾え、窓の向こうを飛行機が割っていく。

モデル事務所として使われる間取りは3LDKで、トウミと林五に一部屋ずつ振り分け、吉田と男性が相部屋。早口な林五の案内でキッチンまでやってくると、バッグを置くよう顎を出される。

「ここ、使っていないんですか？」

「逆にここしか無いし、使わない部屋って」

言っと、リビングへ戻ってしまう。決して丁寧な説明では無かったが、何が触って良くて、何がいけないかは明瞭だった。僕の他にも説明したのかもしれない。林五は質問をさせない話し方をする。とりあえず特に疑問もないので、流し台の食器を洗う事にした。

四人は貧しい、貧しいと嘆くが、蛇口を捻れば水が出る。照明だつて灯る。僕からしてみれば贅沢だ。僕の居た工房では死臭が常に漂い、兄弟の何人かは自ら鼻を潰してしまった。タンナーは鼻が無い姿が泣き顔みたいだと笑い、僕はあんな顔になるのなら泣かないと決めたんだ。

カップを食器棚へ移す際、ガラスに映り込む。そして背後にトウミも。

「サワガニピース」

僕は無言で振り向く。

「どう？ まあまあキレイでしょ？ 基本、外食だから」

「はい、カップしか有りません」

「だって食べるのって人の真似じゃん。人間の振りしてるって忘れない程度に食べればいいから。あ、君は違う？」

「いえ、クロームの基礎はそんなに大きくは違わないと……」

言い掛け、やめておいた。好奇心で輝く目や染まる頬など、もう僕とは比べ物にならないのだから。

「ねえ、トウミは何処で作られたんですか？」

林五と違うのはトウミには隙があり、トウミを作ったタンナーを訊ねさせた。

「え？」

「有名なタンナーが」

「忘れた！」

「こちらの語尾を掻き消す。」

「忘れちゃったよ、そんな事」

「忘れたって」

「やめよ、こんな話はずまらない。それより屋上に行かない？」

会話をかわし、退出していく。僕も後に続いたがトウミは振り返らず、呼んでも無視された。

私室に触れる事を許さないのが林五なら、自身に触れさせないのがトウミ。二人はやはり似ている。リビングの窓から出たベランダ

に、屋上へと続く階段があった。ちょうど風は強く吹き、トウミの口に髪が入ったらしい。ペ、音を立てて吐き出し、登り始めた左足を止めた。そして今更ワンピースの裾を押さえる。

「いけない、パンチラするところだった。知ってる？ あたしのパンツはお金になるんだから」

視線がやつと寄越された。先程の険しさなど微塵も無い。そして僕の反応を待たず、トウミは一番上まで登っていった。しかも裸足で。

錆びた色した階段だと、スニーカーの真新しさをより強調する。僕はわざと踵を擦り付けて、色を移した。汚す理由や意味などない。ただそうしたかった。

太陽の熱が伝わる屋上には大きなタンクが設置されている。用途は貯水である事が丁寧に記されていた。トウミは球体へ耳を寄せ、中の様子を伺う。

「何か、聞こえるの？」

「うっん、何も聞こえないよ」

僕は離れた場所からトウミを眺める。この位置からだとは太陽、タンク、トウミが一直線で繋がり、意識して並んだんじゃないとしても羨ましく思う。こういう偶然は、世界に必要とされているから起こるんだ。奇跡は偶然の積み重ねだと本には書いてある。

「君もこっちに来て、聞いたらいいよ」

目を閉じるトウミ。

「僕はいいよ」

「えー、なんで？」

「きつと聞こえないから」

僕はその場に座り込む。空を見上げながら、耳を塞ぐ。

「だから、何にも聞こえないってば」

トウミの声は耳と手の平の間から聞こえた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4456y/>

ボストンバッグは空っぽだ

2011年11月28日02時47分発行